

志のぶ草

坪井 系

とこへにわが学ひやのともひと

子等は仰かむ君かいささく

あさふ さとたまへるみさへと

わかゆくみちのくるへともせむ

ゆるきなきわが学ひやのともひと

とはに立て、し君にもあるか那

敵へ子のためにとあらはおのかみ乃

つくるも知らぬきみにてあふ

さかつきを重ねてわれにす、めつる

ありうたけのくのはるくあふ

吉澤先生を偲ぶ

三宮 宇佐 彦

先生、資性俊敏、有言実行の士なり。殊に漢学に長じ、漢詩と能す。先生辯論の雄
として雷名あるは蓋し漢学に負ふ所多し。詩書、五経、悉く之を暗誦し、當意即
常に之を譬喩に引用す。其の文才、詩趣の豊かなる三蔵に値す。嘗つて先生の發案
により漢詩研究会を設け餘暇有志職員相會して高瀬放論の講義を聴く、先生亦常
に席に列り共に傾聴す。先生敢て酒豪に非るも、時に杯を挙ぐれば忽ち陶然として彼
の長賢を撫し、王陽明の作詩歌々吟を吟誦す。歌々吟や是れ正に先生の性格を表現
せるもの、先生之を愛吟す、宣なりと謂ふべし。此處に附記して興に吟ぐ以て先生
の靈を慰めむ。我亦拙作一篇を賦して墓前に悵す。

懷曲川先生

明海

滅私殉職是誠忠 嗷嗷何論在世功

一歲忽過冰雪解 多摩墓畔已春風

嗽々吟

王陽明

智者不_レ惑仁不_レ憂。君胡_レ戚々眉雙愁。信_レ步
 行來皆担道。憑_レ天判下非_二人謀_一。用_レ之則行
 舍即休。此身浩蕩浮_二虛舟_一。丈夫落落被_二天
 地_一。豈顧_二束縛_一如_二窮囚_一。千金之珠彈_二鳥雀_一。
 掘_レ土何煩用_二錫鑊_一。君不_レ見東家老翁防_二虎患_一。
 虎夜入_レ室銜_二其頭_一。西家兒童不_レ識_レ虎。執_レ竿
 驅_レ虎如_レ驅_レ牛。痴人懲_レ噎遂_レ廢_レ食。愚者畏_レ溺
 先自投。人生違命自洒落。憂_レ讒避_レ毀徒_レ嗽
 々。

偶感

日傳 島橋 昇 一

自分は近頃「因縁」と云ふことに就いて色々考へてゐる。今まで先人の解釈や理
 屈を澤山読んだり、聴いたりしたけれども「因縁」は文字でも理論でも本當に理解
 表現出来るものではなくて、謙虚な気持ちの「人間」全体で感得するもの、悟るもの
 ではないかと思つた。

この過去の因縁の尊さ、有難さ、嚴肅さに静かに頷の下けられる者であつては、
 り、この「果」をくつてよりよき將來の「因」たらしめ得る人であり、現在の自分を
 限りなく尊い存在と感謝しつゝ、日々是好日の毎日を讚美し得る幸福な人であらう。
 自分の過去の因縁を有難く讚嘆しながら現在あるまゝの自己の存在を尊く思ひ得る
 人であつて始めて他人の生命の尊さも、人の世のかけがひない事も首肯し得るの
 なからうか。

「果」を生ずる直接のちねを「因」と云ひ、「果」を生ずる爲めに資助とあるもの
 を「縁」と云ふと釋かれてゐるが、古来外來の思想では原因、結果は説いてゐるが、
 「縁」に就いては言及してゐない振である。「縁」は佛教獨特の思想である。

何事につけても我々は、ものそのものをまともに見ないで情に流され、習に偏し、或は我にとらはれ、五欲に著し、屈折させたり、陰影をつけたり、色眼鏡で見たりするものである。これが世の中に争があり、不平、不満や、其の他ありとあらゆる不幸の起らない理由であらう。

これを見てもし人生行路の出来事は皆自分と云ふ「縁」を通して、善くも、悪くも、幸にも不幸にも自由自在に「果」を求め得られさうである。要は自分にあるので、他にあるのでなささうだ。

吉澤先生近いて早一年、越中島の埋立地にかたろうがむえとつのと見るにつけて、私は在りし日の先生の面影を思ひ、死の嚴肅さ、尊い人の生涯に頭を垂れてゐる。私はこの頃生命を限りなく尊いものと思ふ様になつて来た。先生の教育に盡瘁せられた御苦労の御生涯は我々有縁の若い者達の今後の精進如何によつて、より尊くも有意義にも、そしてより輝かしくものともなるであらう。要は若い人たちの努力である。

卒業生諸君の将来の成功は、吉澤先生の御生涯を一層意義あらしめるだらう。吉澤先生、卒業生諸君、将来の活躍、これは「因」「縁」「果」の關係の極なものだ。今日から入学考査がはじまつた。雨天体操場にも校庭にも不安氣な面持で父兄や子

供達が澤山つめかけてゐる。先覺者であつただけ、地下に眠れる吉澤先生は今度実施の新制度の入学考査とさそがしおよろこびの事であらう。

埋立地に若草のもえるのも遠くはあるまい、輪煙りとはいて蒸気船が通る、先生の一周忌も同近い。

枯葦の原富士遠く沈み居り

先生の遺硯を洗ふ寒さ哉

鯨香の煙の行方せ鳴ける

曲川忌酒にとろくを悉へにけり

合掌

吉澤精神の一元的帰結

第三期 高橋 寿太郎

吉澤徹先生御逝去遊ばされてより早や一年、近く一周忌を迎へんとするに當り、先生を追慕するの念いよ深く、在らせし日の面影確然として脳裡にあり。轉じて感慨無量なるものがある。

あの長き鬚に包まれた温顔、あの慈愛に満ちた眸、あの青年的元氣に溢れた神姿、

そつて常に大局を洞察して新時代の進路を説くあの熱弁、其他数々の懐き思ひ出は忽然として蘇り、今更の如く先生の偉大性を痛感する次第である。

私は今こゝに先生の追悼文を書く意志を持たない。何とあれは余りにも多くの事実が脳裡に浮び、如何に記述に努めんとしても到底追悼の意を盡くし能はざるを恐るるからである。

餘り乍ら私は吉澤精神の継承者たる自信を持つてゐる。然るが故に敢てこゝに吉澤精神を昂揚せざるを得ない心情に迫られたのである。

我々は三商五ヶ年間の在学時代より先生の亡くなられる迄の間、先生より如何に生くべきかに就いて多くの教へを受けた。我々の心の糧は常に豊富であつた。しかしこれ等多くの教へは一つの主義に貫かれてゐることを知るであらう。実に吉澤精神は一元的に帰納せられ、しかつて又多元的に演繹せられるのである。

然らば吉澤精神の基調を為すものは何であるか。吉澤精神は何を以て貫かれるや、私はこの間に對し明確に次の言葉を以て答へることが出来る。「最善を盡す」、これなりと。

我々は吉澤精神の表現を数多く知悉してゐる。しかつてこれは一つとしてこの精神に帰納せざるものはない。

こゝに一つの例をとつて説明して見よう。

先生は「對上実習」「對人実習」「對物実習」といふ三商の三大実習といふことを説かれた。

「對上実習」とは、神、皇室に對し、奉り最善を盡せとの教に外ならない。神に對し、奉り最善を盡せば敬神とあり、皇室に對し、奉り最善を盡せば忠君となる。國に對し、最善を盡せば愛國となる。

「對人実習」とは人に對し、最善を盡くせといふことである。「最善を盡くす」といふ精神を以て、親に對するならば孝とあり、兄弟に對しては悌となり、師に對しては敬師とあり、友に對しては信とある。人に對し、最善を盡くすといふことは、愛であるとも言ひ得る。

「對物実習」とは物に對し、最善を盡くせといふ精神である。愛物の精神である。物に對しても感謝の念を以て對する心である。この心を以てすれば決して物を粗末にすることは出来なくなる。

釋尊は慈悲を説き、孔子は仁を説き、キリ又トは愛を説いた。これ等は言葉こそ異なるれ、この根本は最善を盡くすことである。

宗教の根本主義は最善主義であるとも言ひ得る。

吉澤精神は最善主義である。吉澤精神のみならず、世界の宗教も、道徳も、凡てこの精神に帰納し得るのだ。

眞理は平凡である、そして偉大である。「最善を盡す」といふことは平凡な言葉かも知れぬ。しかし眞にこの精神を体得した者に、かく断定を下し得るのである。先生の生涯は最善主義を以て貫かれた。先生は亡くなられるまで、教育を思ひ、我々の前途を思つて居られた。先生は自己の生に最善を盡しつゝ、死かれたのである。先生の為されるべき仕事は多く残つて居られたであらう。

しかし、先生の永眠せられたる御顔は、なほ安らかに眠れる如く圓滿であつた。これに、正に斃れて後止むの態度であつた。

自己の生に最善を盡し、かくして天命に従ひたる態度であつた。

先生は死を以てしても自己の主義を實踐されたのである。如何に苦しくとも生きるべき時に生き、死すべき時に死すといふことが、生に最善を盡す所以である。

この時、この處、この人、この物、そしてこの事に最善を盡すべきである。何人も何物も、何事も、恐れず又悔らず、過去を悔いず、将来を憂ひず、たい現在考すべきことに最善を盡すべきである。最善を盡す態度は敬虔であるが、毅然たるものである。

强者たりとも恐れず、弱者たりとも悔らざる心、順境にあつても驕らず、逆境にあつても怯まざる心、これ最善精神の表現である。

この心を以て世に處したならば必ず正しき道を進むことが出来る。

我々は自己の最善を盡し、しかも敗れんとて何事悔ゆることはない。結果は生の際である。眞實の生は結果にあらずして、刻々に変化しつゝ、あるこの働きそのものである。最善主義は正義である。

時に隨ひ、處に應じ、人に向ひ、物に對し、事に臨み、是れ最善を盡すべきである。正しく認識し、正しく洞察し、正しく判断し、正しく處置し、正しく表現することに努めることが我々の生活を全ふせしむる所以である。

吉澤精神は三商精神であり、三商精神は最善精神である。この精神たるや、古今東西を問はず、変ることなき人生に對する一大指標である、と言へやう。

實に三商精神は世界的普遍性を有し、それは宗教であり、道徳であり、信仰であり、信念である。

吉澤先生の肉体は世を去られた。しかし精神は不滅である。先生は我々の心の中に生きてゐる。我々が先生の精神を信奉して活動する時、先生は活動されてゐるのである。私にこの一文を綴らせつゝ、ある者は先生である。先生が今私の名に於てかく

記述せしめてゐるのである。

吉澤精神は実に最善を盡すことに帰納せられ、又このことより無限の事實に演繹せられる。我々が、我々の生に最善を盡すことによつて先生の精神を實現することこそ先生に對する最善の報恩であり、先生の生命を永遠に不滅ならしめる所以であると確信する。
(昭和十五年一月二十九日記す)

故吉澤徹先生御遺族様へ

第一期 野村 一介

拜啓、寒に寒いと寒波を詛ひながらも、眼に映するものが喜めいて参りました。皆様も御元氣でいらいますか。先生逝いて早や一歳をお迎へになります。此頃唯、お此しい思ひで日晷を過しておられます事と存じ、陰ながら皆様御身に差障りのない様、祈願申上げて御ります。

先生逝いて夢の様に一歳を送らうとしております。逝かれたものは戻つて参りませんが、然し、去つたものを求める私の心情も強くなつて参ります。同窓のものか時折集むには、話題が世間話の、学校の事に移り、最後には、故先生の追憶に終ります。親に對して他愛ない、我々を養う子供の様に、先生にあつては、あつては

つた。あつて頂きたかつた。

斯の様に、あつて頂きたかつた等と話すのが常で御座います。

振返つて見ますと、一年の間に色々變つた事がありました。特に御自分の都合で辞められた先生方もおられます。皆私の在學校時代から、頭のてっぺんから針が飛び出す様な思ひで、かられたり、自分が學校中で一番偉い人である様に、い、氣持になる程賞められたり致しました先生方で御座います。此の先生方の事を思つては、先生方の様な羊輩になられても、天職、自分の生活の本分を求めてやまない。

御努力に敬服し、尊敬の念禁じ難いものが御座います。現在學校に居られます諸先生方も、年を経るに従つて懐かしい氣持に包まれます。學校を出てから今日迄一人で世間の荒波を乗り越えて来た間の、とても苦しい事、淋しい思ひをした事、そうして得意だった事等皆語らず解つて頂き、あ、よくやつたと言ふ心情をおこほし下さいますことは、例へやうもない程今後生活を勵まされる事です。

今村校長先生も強い信念で學校を育て下さいます。又好々爺振りで卒業生を護つて下さいます。亡き先生のこととも追憶してやちらに寂寥の念にせめられながらも、皇紀二六〇〇年の新春を迎へて、内にも外にも暖かい空気に包まれて居ります。私も卒業生の一員として、愈々生活を生かす一層努力致し、故先生の靈に

酬ひたいと、筆をとりおがら新い氣魄のみふきるのを感じて居ります。

尙未だ寒さきびしく御座居ませうから、御躰を御大切に―して頂き度う存じます。

敬具

吉澤校長の御遺族をたづねて

玄蕃にあと二日といふ夜、そほふる雨の中を吉澤と書かれた標札の前に立つ。

「まあこの寒いのにようこそお出で下さいました。どうも有難うございます。そんなにまで卒業生の方が骨を折って下さいました。まさか故人も満足な事ではございません。

と、我々のささやかお企てのお話をすると、櫻楓はいかにも喜んで下さるやうに仰有つて二階へ御案内くださる。

雨の軒に當る音が東洋的なさびさびのある静かな雰囲気をかもし出して、そゞろ校長先生のこゝに坐つて日記をもつけておられる姿が頭の中を走りさる。

「思無邪」と書かれた額が丁度黒枠の中の吉澤校長の眞上に飾られてゐる。

お心づくくの暖いお茶にのどをうるほすと、興は一つ一つ糸をたぐるやうに思ひ出されてゆく。

「本當に元氣な人でしたかね、とにかく去年の冬などは又特別に御存知のやうに毎朝学校で寒稽古教練をやるといふので生徒と一緒に三十分も学校の廻りをぐるりと廻るのでせう。普通の人に眞似の出来ないものではあります。その上日曜日まで靖國神社から宮城までとか、宮城から学校までとかかけ通すのですから強いのです。六十六とは思へませんでせう。病氣の時の話ですか？」

前々から無理された身体に四十度からの熱である。しかも猫一年中、最も大切な入学考査と卒業式の直前である。當日はその大事な入学考査の口答試問の日である。余程の無理であったには違ひない。それでも突然調子の急変を来して隣りの宿直室へお寝みにあつてかゝも仲々元氣に廻りの人に話しかけられ、「ここなら隣でゝゐる口答試問の梶子も手にとるやうに判るし、いざといふ時にはすゝへ行けるからね。」これが絶体安静にせよといはれた位の病人である。

こんな所では手當も思ふやうにゆかあいがらうてもとどこかへ入院する必要があり、と、いくら勧めても承知するやうな答はない。「村田博士なら教へ子だし、自分の家へ行くやうなものだから行つても良いな」と言はれた一言で、それ氣の替らぬうち!! とばかり――

入院されてからは、村田博士も殆んどつききりで鯉の生血が良いといふので、方々

裸けて歩いたり、千足屋までとんで行って柿を買って来た、とにかく盡くせるだけの看護はしたのだった。

「胸が一才痛いから」

「どうかしたのではありませんか？」

「去年の暮、山へ行つた時二度ばかりつまづいて、一才うつただけだがね、エッ？ 余病、余計な心配は要らんよ、さア起きよう、どうしていけないんだ？ だから医学部は役に立ちん、とん／＼動ける者を宛で動かさないと寝かしておくから病氣のよくふらないのは當り前だ。今日部屋の中を歩いて稽古してゐれば、明日から入学考査に立會ふよ、かうしてはゐられぬ。起こしてくれかいのかい」といつた具合。それでも三月六日の卒業式は一才長い間だから無理かも知れぬ、十一月にしよう。三月十一日に、君すぐ府へその事を申請に行つてくれかい？ エッ。さうしてその使のまだ帰らぬ内吉澤校長は、眞徳院大光徹心居士 となつてしまはれた。

眞徳院大光徹心居士！！

「……全くと……徹心であるのですからね、だから強いのですよ、十分に考へて論をまて上に教へ信念をそなへてゐるのですから、誰の前でも遠慮なく堂々言放

てるし又とん／＼実行しようともなされたのでせうし。

強い信念、正しい論理、曲折自在の話術、

九時頃お暇する。

思ひ出話のかす／＼に時のたつのも忘れてゐたが、外へ出るといつしか雨は雪とあつて道は白くうづめられてゐる。美しい。

吉澤徹先生

第七期
青

水

正

一

吉澤先生がふくふくされてから、はや一周年にある。この本の名は追悼であるが、私にはありきたりの追悼は嫌ひである。何故ありきたりの追悼が嫌ひかと言へば、ありきたりの追悼とはた昔の事を思ひ出して感傷的にあるだけの事だからである。

我々の追悼は魂を以てしなけれはならない。

我々三千人の生徒は先生の朝禮で語られた言葉を忘れる事が出来ない。

先生によつて注がれたる熱情は血管の中に脈々と流れて波を打つてゐる筈だ。

我々の追悼とは即ち先生の意氣と血を受けついで、人間として眞摯に生きる事である。

三千人の生徒、眞摯に生きる限り、先生の精神はほろびる事があるであらう。

思ひ出

第六期
森

子 耀

早や吉澤先生の一周忌を迎へ、実に感慨無量。在学五ヶ年間の思ひ出が歴然と浮んで来る最も印象のある事を思ひつくま、記して見やう。

三商の卒業生仲間の話を聞いて居ると、卒業生が「学校」と考へる時には常にその底に吉澤校長を併せ考へて居るといふ事が判るのである。勿論中等学校では生徒が最も強き影響を受けるのが「校長」であるといふ事は小学校に於ける担任の訓導の楯に當然な事ではあるが、中等学校に於ても三商が他校に比して此の急務更強いのを感じるのである。之は三商が創立後日淺き爲、創立者「吉澤先生」の精神が其の儘三商精神と成つて居る事、及び人間「吉澤徹」が中等学校教育者群に於ても比ぶる強烈なる個性と独自の識見を有して居た点、其の上生徒及卒業生に對して持たれてゐた宗教家にも似た「愛」と卒業してからつくづく感じられるからであらふと思ふ。

此の生徒に對する愛情こそ吉澤教育の根本をなして居たのである。此の親が子に對

する處の愛が、殊に樂まつた卒業生を心配下さる点に於ては、私が未だ他に其の例を知らないのである。

卒業式は三商に於ける最も重要な儀式とせられた。四年生以下の生徒は先づ予行式を行ふ。いざ式におると講堂に入つて二三十分、そろ／＼参りかける時分に卒業生が入場して来る。夫れから四時間近く式が嚴肅に行はれるのであるが、未賓父兄が多勢見えるため、席が実に窮屈で而し終始緊張してゐるのである。禪と思はせる程苦しい此の式は何の爲に之程大変な式をやるのだらうとも思つたが、其の中に頃は廻つて終る自分が送られる時が来た。

卒業するといふ感傷を抱いて式に臨んだ私は、其の時学校の總ゆる部門を動員し、大きな犠牲を拂つて、卒業して行く者に、最もなつかしい、最も美しい姿で、「学校」を印象づけて卒業させてやらうとされた先生の、愛を土台として教育を判然見せる事が出来、今迄も万事此の通り心配せられたのかと思つて有難さに男泣きしたのであつた。

私が卒業して翌年の二月、私達のクラス會を学校の元の教室で開いたのである。確か八日だから大変に風の強い日で、内前仲町から学校迄何度も後を向いて足を止め、風を背に受け流してやつと校門に辿りついた桶な日であつた。午後二時頃から始め

廿七、八人集つたが、卒業して一年近く久し振りに主任の先生を中心に級友相集つたので、あつかうさの命り幼稚園の楳に風船やテーパーを吊して一同大いに旧情を温くしたのであつたが、其の時吉澤先生が来られ「卒業生が学校で級會をやつて呉れたのは君達か初めてである。正月の寒い時に学校でやうと云ふ君達の氣持が嬉しくい」と大變に喜ばれた。我々も之程に老校長を喜ばせる事が出来たのかと嬉しがつたのであるが、夫から二ヶ月足らぬで先生は逝かれたのである。

今でも私は先生が亡くなられる直前にあの楳に喜びを與へたのだと思ふと、何とも言はれぬ誇を感じるのである。炎天下、寒風下に毎朝訓話をなされた先生。

若い我々が歩けば必ずついて来るがれた先生、朝社前に校長室で生徒と卒業生の健康を祈り、殊に卒業生に對しては「実社會で雄々しく働く若き卒業生がつまづく事なく、懼る、事なく各自の持場々々で最善の努力を盡すことが出来ませ楳に」と御祈り下さった師。

卒業してからお訪ねすると、下度久し振りに自家に帰った子供を迎へる親の如く、「仕事は如何だ、身体は如何だ」と心配下さつた吉澤先生、斯く記しては實に限りなく、なつかしく思出されるのである。私は未だ両親揃つて持つて居ります。然し私は、

「孝行のしたい時分に親は無し」

といふ言葉と吉澤校長先生と失つた事に依つて残念下ら味はひ盡してしまつたのである。私は現在、又將來も眞剣に、亡き先生が最も喜ばれる事を、先生が我々に望んで居られる事を考へてゆき度いと思つてゐる。夫れが亡き親に對する子供の唯一の孝養であらうと思つて居る。

吉澤先生に学ぶ

岡 岡 一 郎

「對物」

常に物に觸れ、物を知らしめ、遂に自分の物とまで覺らしめんとする。即ち物の有難味を知り大いに活用し、或は節約もすべきことを導がれた。環山莊に例を採れば唯、学校の別荘どころか、体育場としての遊び場と考へられぬものがあります。國府台の一角に土地を得、其處に家を建てる迄は先生が行ひ、それを自らのものとして生徒に活用せしめんと導びき、莊に在つては物を作り土地の物を困ひ、又は得て過すことによつて総ての物が我々に満足感を與えるまでの工程の苦勞、物の眞の

價値を知り得ることの次でも多くある程に即ち對物の判断を養ふべく事に當らして教へて行のれちものでありませう。

「對人」

感情の微妙な動きの兎角私れがちな面を濶歩出来ることと自覺した時は随分愉快なこと、思ふ。人に對して分別を知り、氣分を著着かせて常に自己を活かす信念を持つことでありませうが、但し虚榮を有する自己であつてはあらぬ。これは學理では亦く、各々異つた場合の實際に當つて、体験によつて學んで行くのである。

人に和することは必要である。和することの出来る様に心を練らなくてはならぬが、同和することは考へものである。此處に独住の精神を養はなくてはならない必要がある。最後は自分一人の氣構えを持つことによつて信念が築かれて行く。

「知恩」

「恩を知らぬものは不道の災難に會ふべし」この言葉を先生より解かれて今日尚強く頭に残つて居る。先生は會食によつて生徒に四恩を知らしめ報恩を教へられたことによつても特にこの教育に力を入れられて居た爲と思ひます。

恩は上にも有り下にも在る、君恩、父母の恩、師の恩は小さい時より強く言はれ又同輩の恩に感ずる。然し目下の者にも又それ（恩が有ることを忘れてはならぬ）。この意味から考へてナポレオンは苦勞を共にした妻の恩を忘れてから以後敗者の憂目を味ふ結果となり、蒋介石も同く運命に存することも肯ける次第であります。一家庭内、個人間であつても大と小の異なる丈けで同じ意味であること故恩は相互のものなり。

最後まで黒色であつた髭を撫しながら先生の壇上に登ると偉大なる教育者としての雄辯を振ふ姿は一度接した者に忘るゝことの出来ない迫力、印象を與へられた。翻つて社會的には強い信念を抱いて押し進まれ三箇の短日月の内に今日在るを築かれたことは偉大なる事業家の如き面影も伺はれる。

先生は論ずる前に体得せられて居られ経験による正しき判断の言論たる以上常に人を屈する鋭さを持たれて居た。先生何時も希望に満ちた理想を抱いて居られることは朝禮の訓話のときにも伺はれた。その一つが實現しても又次の理想が醸し出されて居た。私の低学年時代に耳にして居た一つに、修学旅行の目的地を太平洋の彼岸北米に向けて居られることを、時折語られたのも遠大なる理想の持主なる故でありませう。

吉澤先生に對して感ずたこの片鱗ではあります。茲に述べさせて戴き、頭書に三箇の熟語として親しみある二三の言葉を列べ所感とも併記した次第です。多摩の靈域に眠られる先生を追懐する切々たる情の永久に変わらざるを誓ひ、後重にも御冥福を祈りつゝ、終りといはします。

校長先生を偲びて

七期生
齋

藤

晴

海

廬山に入つて廬山の火を知らず、自分もその一人であつたかも知れない。その理想の悠遠なる、その哲理の深遠ある。吉澤教育のあまりに大なるが故に学生時代ついにその心を知り得、到達し得なかつたことは三箇卒業生として衷心より慍悵措く能はざるところである。「最善」といふ。

言たる易く行ふに難き辞である。三箇五ヶ年脈々として流るゝものその二字であらう。先生の辱に壇上に於て諤られ、又先生躬を以て範を垂れ下さつたところである。「落弟なく、微罰なく、又入学試験なき学校は恐らく今日学校としては其能を具備せよ」と、世人は言ふかも知れない。然し三箇精神の赴くところ必ずやその成果を期す。と十年前に喝破したのも先生であり、それを成し得たのも先生である。既

に入試の問題に至りては、現今世を挙げて評議されつゝ、あり竟に実施を見るに至つた次第である。

更に三箇生一千五百。皆一律に紳士的對度を以て任じて居る所以のものは各自の心に於て最善の行を断行せるとの自覚に基づくものでなければならぬ。卒業生又然り、他校に比し何等遜心なくかへつて評判がよいと言つても過言でない、現況のものにはやはり卒業生各自の自覚によるものでなくてはならない。

「敬神」と言ふ。

この点に於て自分の最も深く先生に教へられたものである。一平、入学式と同時に伊勢神宮の御札を頂く、五ヶ年肌につけ瞬時も日本の一支柱たる自覚を失はず、又毎晝食前「食前感謝の辞」を以て四恩に感謝つゝ、人たるの道をつくさん事を期す。他校又比を見ざるどころである。

十四年元旦。「映島會」といふものが出来た。會名はその年のお勅題「朝陽映島」より採つたもので、従来の日曜日の不規則な生活を一変せしめやうとする先生の提案により、生徒有志の既に数回行はれ、好成績を挙げ得たものである。即ち月に二回。日曜早朝六時頃、霜柱を踏みつゝ、明治神宮、荒國神社、等に参拜、後者々しい空気を充分吸ひつゝ、馳歩行進等により体位の向上をはからうといふ趣旨である。

會の實施せらるゝ、や先生常に陣頭に立ち馳歩行進に楓爽。訓話に儼然。心にふれてたゞ、頭の下の思ひがくち。

又毎日先生は明治神宮の参拜を欠かさず、ひたすら生徒の加護をお祈り下さつたさうである。

「歩け」といふ。

一年―郊外一周。二年―多摩川遠足。三年―一ノ宮廠舎生活。四年―富士裾野騎門廠舎より箱根六里の行軍。五年―習志野八里大行軍。後歩旅行等枚挙に遑のない程である。

常に先生の生徒の体位の上の心配は大なるもので冷水摩擦に寒稽古教練に萬全を期せられてゐたのである。

「先生」と

眞に接し得たのは五年の時で、それまでは校長先生とは絶對的なるものとして恐れられてゐた次第であつたが、一度指導訓話に際して心に接して以来、教育者として非の打ちどころない先生と慈父の如き先生とに、たゞ感服した。その率直おのひかりのおいまごころが生徒の心をつかむのである。

今永久に鎮まります。多摩の聖域。先生の墓前に立ちて往年を回顧する時といた

だ先生の懐くと思ひ出に轉々感慨無量のものがある。

先生は生前「時局がら生死の問題に直面する。生は何だ、死は何だと考へざるを得なくなる。一輪の野の花さへも咲くべき緣由あつて咲く。唯漫然と咲くのではない。天地間のもの一として理由なくして存在するものはない。萬物の靈長といはるゝ人間も此の世の中に生れ來りて生息する。唯漫然生れ來りて唯漫然し去るのではあひ。孔子は「未だ生を知らず焉人を死を知らん」と言つた。しかし何と言つたところか。死を嫌ふのは人間の本能だ。惟一人類に死と言ふものがなかつたらどうであらう。かへつて死を讚美するやうにあるだらう。要するに死は扱めんとして、扱められるものでもなければ愛られんとして愛れ得るものでもあひ。自かつ時と場所とがある。其の時と場所とを失はぬことが最も大切であるまいか」とおつしやつたことがある。深く味ふべき語であらうと思ふ。自分もかくありたいと思ふ。

吉澤先生、あまりに偉大なりしが爲についにその心を摺る事の出来なかつたことは深く憾みとするところである。

異國にて

先生の逝去を知りて

第三回卒業生
陸軍歩兵上等兵

伊井

孝

雄

遙く東滿の一角にて先生の死を知りて早くも一年にならんとして居る。其の時に當りて、先生の追想録の一端をけがす事の出来る事は自分の最も喜びとする所なり。先生！先生と呼びても今は既に答へなき慈父の如き吉澤先生と最後の別れは忘れもしない昭和十三年三月十二日、小雨降る品川駅頭であつた。

その前日先生は考査に御多忙の中を態々御老体を赤羽の急頭に運はされて「俺が陰に附いて居ると思つて安心して」つかりやつて来い」と云はれた、そのお言葉に依つて志氣がやゝもすると遅緩するのを緊張させて一年有半東洋永遠の平和確立の爲東滿の一角に於て警備に任ずる事が出来たものと深く感謝して居る。

思ひ起せば卒業したばかりの春、朋友四五名と共に先生を誘つて羽田の沖に網（鯉）釣りに行つたのどかな春の日和に、大海系を鷹を置いて新鮮なる魚を食事をする父の如き先生と對座して本當に心持ち好く一日を過す事が出来たのも忘れられぬ思ひ出の一つだ。

又在滿中學勢多忙の中、再三再四懇切なる親書を頂戴して、いつも有難くて感激しつつ、読んだのだつた。

十年一と云ふが先生が実行されて居た入学考査の方法が今になつて漸く全般に実施されんとして居る吾々の得意又思ふべし。

吾々にとつて先生は實に慈父であり、又よき相談者であり、將又よき指導者でもあつた。その先生が去りて全く呆然自失する外はなかつた。しかしながらたゞ子供の如く泣いて居たのでは、五年間教育を受けた者として耻べき事である。吾等は宜しく赤ん坊の東京府三高と今日め如き光輝ある学校になされた先生の生死を暗くした御活躍の賜と深く臆に銘して實に強化すべく、新に戴いた今村校長先生と吾々卒業生一致協力によつて実現すべきが吾々教へを受けたい生徒としての當然の義務でも有り又報恩の一端で有ると思ふ。

自分は不幸にして昨年九月病の爲に内地に送還された哀れなものだが、しかし必ず元氣な身体に戻して國家のために盡し又学校の爲に微力ながら盡すことこそ自分が先生に對する報恩の一端と思つて居る。

あゝ今でも先生が赤羽急頭に立ちられた姿がまがくと浮んで来る。なんと！でも残念な事は先生の死にお會ひする事が出来なかつた事だ。

自分以上の不幸な者も居まい。

吉澤校長先生を慕ひて

第七期
川宮 登志雄

入学試験といふ一つの難関に向つて僕等が小さく胸を躍らせ乍ら、幸にも三商に入学出来た時に、あの廣い講堂で合格者に對して御訓話下さった先生の御姿を自分は今でもはつきりと記憶してゐる。先生は其の時「諸君は幸ひにも多くの入達の中から選ばれて本校に入学出来た人達である。諸君はまことに幸福であるが、然し諸君の背後には、不幸目的を達し得ずして悲運の涙をのんだ人がどんぶに多いことであらう。諸君は、入学の喜びに許りふけらず、斯様な入達に大いに同情する立場にあるのである。又諸君は本校に入つた以上は、自分は全責任を以て諸君を立派な人間にするべく努力する覚悟である」といふ實に力強い、又慈愛の溢れた御訓話を受けたのである。まだ三商の生徒として極く幼稚であつた我々の胸に、此の御言葉は強く響いたのである。斯くて僕等は立派な三商生とある事を胸に描いて、所謂三商教育を受けてから、或時は先生は我々の慈父ともなり、又或時は慈愛深き教育家と

して陰に陽に我々を御指導下さつたのである。創立未だ日浅き三商の一期より七期に至る卒業生の殆どが現在実業界で活躍し、三商の名を汚す如き事などは未だ一度も耳にした事なく、三商の名譽を益々高めて行きつゝ、ある事も皆吉沢先生の御努力の賜と自分は常に感謝してゐる。

又吉澤先生は学校に居られる時は勿論、家に居られた時でも、自分の事は弟二として、いつも生徒の事を御考へにおつてゐられたさうである。人間は兎角「人はどうでも先づ自分だけは」といふ氣持を起し易いものである。他の人は轉はうが跪かうが、自分さへよければよいといった利己觀念は、此の世の中には皆無とは言へない程である。然し先生はその程な人は好しむと言ふよりも全く見られなかつた。常に我々の事を考へて下さつて、「自分はこうならうとも諸君さへ立派な人間にあつてくれれば、自分はそれでもう満足である」と屢言はれてゐた。簡單ではあるが此の御言葉に依つて先生が如何に我々の事を御考へ下さつたかがよく分るのであらう。

又先生は智育、体育の外に、他の学校ではあまり重視せられ、常に我々をその方に御指導下さつたのである。その具体的ならはれとして、毎朝の五年生の指導訓話を挙げる事が出来よう。一面から見れば毎朝最上級生といつても人間として未完

成なる者が、種々な訓話をする事は、時には形式に流れて無意味だと感ぜられな事もなかつたが、然し今とあつてみれば、自分はその時あの様な事を皆の前で話した以上は、自分から率先して実行し、それを範としめねばならないといふ氣持が自然に生じ、今迄案外無関心だった事にも氣をつける様になり、又自己の体験といふ事を重視する様にあつてきた。つまりあの時は、唯話を聞いて自己を反省するのみだったのである。之れ皆先生の御力だと思ふ。

我々の今日あるのも皆先生の御陰だと思ふと、亡くなられた先生に對して茲に深く感謝の意を表する次第である。

全く先生は我々の爲に生れ、我々の爲になくなられたと云つても過言ではあるまいと思ふ。先生がなくなられた時、我々の爲に最後の最後まで頑張られたのである。僕等が在校中演習に行く時など、行帰りに必らず先生は我々を送り、又迎へて下さつたのである。殊に演習が終つて疲れて帰つてきた我々を、にこ／＼と笑ひ下ら御迎へ下さつた先生の御顔を見た時、我々の疲れは一度に消えてしまつたものである。現在でも尚僕等の行爲に對して先生が色々御指導下さつてゐる様に思はれてならない。先生の御姿や御教訓は僕等の頸から永遠に消えないものとなつてゐるのである。

ある。

以上の事を考へる時、吉澤校長先生の偉大なる御人格に對して自然頭の下るのを覚える。そして人間として人として涙なくして追慕せよには居られないのである。

先生を御慕ひすると同時に、僕等はきつと先生の目標とされた立派な人物にあらん事をお誓ひする次第である。これこそ我々の先生の御恩に酬ゆる唯一のものであると確信する。

最後に先生は惜しくも業半ばでなくなられたが、先生の業を上へられた三週教育は、より一層高められてゆくものであると自らは固く信じて居ります。(以上)

吉澤先生を偲びて

第三期
飯

田

真

六

「吉澤先生の教へ子であつた事の歎び」

日々新しいものを吸収して延びゆく青年にとって、最も幸福あと思はれる事は、高潔な人格に接し得られ、真底からその方を崇敬の出来る事だと思ふ。そう思つてゐるから、私は今でも私の三箇生活に非常に幸福なものであつたと、又それが自

分にとつて尊い糧ともあり、土台ともあつたと確信してゐる。吉澤先生の教へ子であつた事の幸福感がそれである。

吉澤先生から私の受けた恩恵は、総べての人が意識してゐる。目に見えた数々の事からよりも、別なほかの何かをうけた幸に於いて、非常に高く高いものであつたのではないか。……強い信念を持たれた、何とも知れず毅然とした御風格は、その教育方針の成果と共に、常に私達の上にあつて高い教化をなした。先生の清熱、私達は今も猶新しくそれを感ず、それにこの上も高い尊敬を感じ、又それに鞭打たれる思ひがする。

「吉澤先生の教育の底に流れてゐるもの」

先生の教育方針に就いて夫れをとやかく私達が言ふべきでなく、その場合でないとは思ふが、一言云ひたく思ふ事はこの事である。

先生には常に生徒個々の人格を尊重し下さつて、又生徒個々の人格を尊重したいといふお心持のあつた事で、之は先生がお試みになつた種々の御方策の宇に一貫して流れてゐた所のものであつたと信じる。之がヒューマニズムであると人は言ふかも知れないけれど、唯それ丈でなく、今言つた、「自分の子供達は此上もなく立派な青年であり素材である」といつても信じてゐたい。(といふ事は、それに努められた

といふ事)といふ親心であつたのであらう。常に物の表面うへのみを見てゐるよ。その人々は、或ひは三箇の政策となり、教育方針なりの表面にあらはれたもののみとか、形とか、不幸にして予期しなかつた結果のみを見て考へる丈だから、私達教へ子達が知つてゐるからいふものは判らないと思ふが、之は結局自由主義とか、全体主義とかの何々主義、何々主義と人間が自分勝手に自分達の頭の中でテツ子上げた、逆に言葉から生れて出た様な結果にあつた……「觀念」なんかを遙かに超越したものであつた。

私は卒業後も、先生と個人的に接していただく機会を遂に持たなかつた。痛恨の極みであるが、然し私は上述の様な感じ方に於いていつも、私の小さな生活の上に、今猶、吉澤先生あの溫和さ、然し若々しい情熱の秘められた眼差しが、それがれてゐると、固く信じてゐるのである。(以下)

謠

山 本 辰 治

「よくや身のかくでは果てし只頼め……」

鉢の水のロンギに寄せて卒業する我々の感慨が講堂一杯に漲る。

校長先生の温顔が満足さうに微笑んで……
御鬚に手とやる癖も懐かしく……

ほーつと霞んで

父兄席も涙であつた

三箇の前を通る人々は窓から洩れる朗々たる謡の声に驚く。そしてその声の主が背
廣姿の小紳士群ぶのに再び驚く、
抑も校長先生が全国の學校に魁て精神の糧として謡曲と正科に取入れられたのは我
々が未だ教矢小学校に間借してゐたときであるから、確か昭和四年であつたらう。
最初池内信嘉先生が

「あいうえお

と發聲を教へられたときは我々も実に可笑しかった。

近所の人も

「お宅で謡をなさるのは誰何ですか？」

まあさうですか！

学校で謡とねえ

と呆れてゐた

それが卒業式には「螢の光」に代へて「鉢の水」を謡ふ迄になつた。

先生の驚ぶることは総てさうだ。常に世間に一歩先んじて居られる。世間では初め

呆れて笑ふ。そしてその成果を見るに及んで更に呆れて感嘆する、全く

「初め笑ひし輩もかほどの御氣色、さそ羨ましくあらん……」

卒業後同好の士が集つて松平先生を中心に謡の會を創つた。校長先生は之に「時雨

會」といふ名を附けて下さつた。

一寸忘れたが

時雨を松の色勝りけり

とかいふ和歌に由来してゐるのださうである。

先生は時雨會へ一度御来會下さつた。そして我々の下手ぶ謡を一時頃から夕方迄
つと御聞き下さり、

「諸君がかういふ高尚な趣味で一日の日曜を過ごすといふことは誠に喜ばしい」
といふ意味をお話し下さつた。それも今では懐かしい思ひ出とあつてしまつた。

我々の今日あるは実に先生の御陰である。時折近所の台所が大恐慌を来すのも先生の御陰であるといつた小唄苦笑あさることであらう。
 〔常世御教書賜りて……〕
 ラチオで喜多実が鉢の水をやつてゐる。卒業式が思ひ出される。
 ほーつと霞んだ先生の御顔が。

追 想

第七期
本

江

清

私が今、校長先生を思ひ出して見ても、私にとつてはどちらかと言ふと、丁度小学校の一年生が、その校長先生を考へる様に、遠い存在の先生であつた。膝を付合して話を伺はふい逆も、直接私の意見を述べたり、又校長先生自身から普通の授業を受けたわけでもあゝからであらう。それに卒業後御會ひして話す機會があるわけではふかつた。只、校長室に見る先生、朝禮台に見る先生、とつて追想申上けるに止まるのである。

兎に角、三高卒業迄に、私が入学前に考へてゐた中等学校とは別の珍らしい様な事柄に相當に出喰つた事を考へて見ても、先生は随分變つた教育を行つてゐられた事

がよくわかる。それ等の中には未だに變つた事と考へる事が出来ないものもある。成程と合点のついたものもある。そしてそれ等が、嘗ては波の荒いと言はれた社會と言ふ世界で、有形、無形の役にまつてゐるのは面白い事であり、校長先生自身も成程と考へて見る事もある。

生徒を非常に可愛がられて、一にも二にも生徒と言ふ先生の事を他の先生方からよく伺つた事がある。紳士的に取扱つてゐられるのか、子供の氣持を束縛されなかつたとしても言ふべきか、とにかく生徒を愛された結果であらうが、私はこの遣方に時々不満を持った事があり、今でもはつきり呑み込めない。この先生の態度を逆に履き違へた悪い生徒を見かけるからであつた。非常に可愛がつたら、こゝろ事があるのは當然かも知れないが、もう又し所謂嚴しくやつて下さつたらよかつたであらうと思つたりした。けれど、嚴しく行はれたとつての結果も、よく考へて見ると思ひ半ばに過ぐるものがある。こゝろ事を考へると結局有難い先生だつたと思つて思ふ。

それに一つつても、あの黒い鬚をいぢくりあから、何時盡きるとも知れぬ話を、悠然と語つて居られたあの姿は、誰にとつても何時迄も忘れられないものであらう。何時であつたか、確か、実業教育五十周年記念の祝賀式が、代々木の京で行はれた

時の事だつたと思ふが、一寸リンカーンを思はせる風貌の先生が、モニニカか何かの禮服を着て、シルクハットを被つてゐられた處は、とても立派なものであつた。高位高官の人々と並んで決して見分りのする先生ではなかつた。

その先生がなくなつて、御宅で葬儀の日、私は十人余りの生徒の代表と共に、御遺骸の入つた白木の棺を持つて靈柩車に運んだ時の氣持は、只感慨無量であつた。この事があるだけに私は校長先生を一卒業生として考へるにも、最後の先生の手と觸れたといふ事に時々誇といふ様な嬉しさとか、又何とも言へぬ追慕の念を呼び起される事が屢々ある。

吉澤校長先生

第二期

桑田宗太郎

三商創立以来粉骨碎身三商のため、実業教育のために身を捧げられ、三商の基礎漸く鞏固を如へ、卒業生を送る事既に六回、先生の御努力が幾分なりとも報ひらるつゝある昭和十四年二月二十六日。

先生は最後まで入学試験の事と新卒業生の就職の御斡旋の事を御心配遊ばされつゝ遂に御過勞の爲職に殉せられまゝ。

和漢洋の字を融合せる高邁な事績見により僕等をお導き下され、そして心を啓いて下された先生の御高恩に對し何も御酬する機會なく永久にお別れせねばならなくなりまゝ。

先生は信念の人、正義の人、そして時代を超越された方であつた。今年から行はれる入学試験の学科試験の廢止、又最近盛に學生省あたりより奨勵されてゐる「徒歩旅行」といひ、三商では既に創立以来実行されてゐた事です。

高山樗牛の碑に刻まれてゐる「吾人は須く現代を超越せざるべからず」といふ言葉が目に見えてきてなりませぬ。

徹心!!!

先生の戒名「眞徳院大光徹心居士」の中の二字です。

心を徹する事、即ち信念を持つ事、物になりきる事とも言ふ事を出来ると思ひます。信念のない人間に何が出来る事とせう。又なりきれない人間に何が出来る事とせう。

宗教とは「生きぬく事と死ぬる事を教へるもの」といふ事ですが、これもこの「徹心」といふ二字によつて言ひ盡す事ができると信じます。

先生、僕はもう先生のあの温容に接する事は出来ないのです。心の燈台を尊はれ

と様な感得です。然し世の一切は有と無との循環です。後に感傷と哀傷に惰する者ではありません。「微心」の二字を處世の金言として実業界の立派なる一分子となつて行く事こそ、先生の御鴻恩に對する唯一の御報恩であると信じて止みません。

吉澤先生を偲びて

第三期

覺悟を新にす

田

島

達

夫

吉澤先生去りてより光陰天の如く、今や一周忌を迎ふるに當り、門下生たる吾等追慕の情愈々昂るの時、有志諸兄によりて追悼録編纂の議起るを聞き、喜びに耐へず敢へて愚筆を省み亦一筆呈する次第なり。

惟ふに、吉澤先生の如きは、創造的、積極的にて、進歩的、建設的ある事、正に新時代の要求する偉人に相應し御人格にて、其の教育たるや一として創造的ならざるは無く、殊に入學考試に於ける學科試験廢止の如きは、十数年の創立當初より実施し居れば、世人に優ること数十年の進歩あり。洵に其の進歩的にて光覺的あるは、唯々警異の外無きものと云ふべし。

斯くて先生の御人格は其の儘先生の事業に反映し、事業を語る事即ち先生を語る

に今行く、吾等は先生と一のぶ毎に学校の施設を思ひ、学校の行事を考へ、思ひを新にする事常あり。

洵に先生の如き仕事に自己の全情熱を捧けて奮闘努力せらるゝ、人士の極めて歎く然も世人の期する人物正に先生の如き人士あれば、宜敷く吾等門下生は、先生の嘗つての御教訓を体し國家社會に貢獻せざる可からざるものにして、亦是れ地下の先生に對し報ゆる唯一の方策なる事を信じて疑はざるものあり。

春の淡雪

(一周忌につらありて)

頃きざは如月下七日

午下りな台午後一時

一歳前のけふこの日

職にたほれし先生を

忍ぶ法要の集ひあり

處 築地の本願寺

※

勤め持つ身のわれおれば
心はゆたてにばやれども
定刻まではおほつかず
おukれて来る、二時近く、

※

足を早めて門に入る

われの前ゆく人のあり

これそくしくも先生の

遺しゆかれ方々の

同しく急ぐ姿あり

今日の心境如何があり

※

中に左右の手をとられ

老ひたる身にもいそぎつゝ、

石段のぼるその姿

夫人、ひとほ哀れあり

※

われもいそきて本堂に

上りて見れば今ははや

満堂余地なく人集ひ

先生の徳、今更に

感ぜらるゝもうれいかり

※

おukれ来りしことふれば

も早、読経は終へくらむ

切々胸打つ聲のあり

これを保護者の代表の

靈前さ、ぐ平辞なり

※

次いで同窓野村氏は

我等の心そのまゝに

先生慕ふ眞情を

涙と昔に語りなき

※

私の耳には今もある

かのかあぐみのその聲を

文字についで書き置かん

心眼以て読み給へ

心の耳もて聴き給へ、

※

弔 辭

檀原神宮ヨリ鳴ヒビク、二千六百年ノ大鼓ノ音ト共ニ、茲ニ一億ノ
我が同胞カ歴史のナ輝カシキ二千六百年ヲ迎ヘ、全國民擧リテ皇國
ノ繁榮ヲ喜ヤ奉ル今日、先生既ニ亡ク夢ヲ追フカ如キ一末ノ寂寞ノ
中ニ、日時ヲ送り早クモ一歳ヲ迎ヘタリ。

茲ニ謹ミテ今ハ亡キ先生ノ靈ニ捧ケントス、

先生ハ昭和三年我校創立ト共ニ終始一貫、強イ信念ヲ以テ我々ヲ訓
育セラレタリ、熱情溢ルル言辭ニ犯シ難キ一擧一動、先生ノ総ベテ

か我々ヲ心醉セシメタリ。

常ニ對神、對人、對物ノ念ヲ深ク持テト云フ遠大ナ教育方針コソ我
々一社會人トシテ慟ク今日モ、尚、益々深ク之レヲ持シ座右ノ教訓
トシ來リタリ。之レヲ通シテ教育ノ誠ノ味カヒシヒト胸ヲ突クト
キ追慕ノ情愈々深ク、先生ノ早逝痛恨ノ感曰ニ曰ニ新タナリ、我々
ノ喜ビヲ共ニ喜ヒトナシタマヒ、更ニ戒メテ頂カネバナラヌ時、我
々カ苦惱ニ何處迄モ強ク打克ツ様諭シテ頂カネバナラヌ時、先生今
ハ亡ク、茲ニ先生ノ肖像ヲ前ニシテ詠ヘ、而シテ語ラネバナラヌ心
情如何トモ致シ難ク、唯々天命ノ嚴シキヲ嘆ズルノミナリ。

先生ハ病ヲ冒シ熱ニ苦シミツ、尚精神力ニテ之レニ耐エツ、公職ニ
努メ、以テ病ニ劇レル迄、示サレタ生キタ教ヲモ係セ深クウケツギ
我々ハ此ノ國事多難ノ折、現校長先生及諸先生父兄ノ指導ヲ賜ハリ
粉骨碎心ノ氣慨ヲ以テ社會人ノ生活ヲ全クシ、母校後輩ノ指導ニ努
メ以テ先生ノ靈ニ答ヘントス。在天ノ靈莫クハ享ケヨ。

昭和十五年二月二十七日

東京府立第三商業學校同窓生代表 野村 一介

※

先生ゆきてはや一年
今三商を背負ひ立つ
後輩諸君の代表は
つゞきて靈に訴えぬ
我等の螢雪とくみよと

※

高瀬放論の立つありて
かくも多数の来會を
厚く謝するその後
現校長は病めるため
心あらすも臥しおると
ゆきとゞきたる言葉あり

※

この時我の想ふやう
我等が母校のそが爲に

今なき若澤先生も

病める今若先生を

かふらまもり下さらん

※

かくて式典をばりなほ

一般會者の焼香で

ひとほ高く香ゆらき

さくもにひろき本堂も

かんほくき香にみちにけり

※

其の香にわれはむせびつゝ
有りし日の先生を
亦もや強く慕ひたり

※

小人 俗にあきめくら
先生も見えずにあれこれと

とやかく云へる人もあり

※

されど偉大な先生の

残りかしの精神は

やがて我等の将来に

芽をふき木となり花となり

実とは結べるその時も

訪れ来ることあらむ

※

時はやう／＼春めきて

梅に集てふくうひすの

声も吾等によびかけぬ

君等の責務重きぞと

君等の前途幸あれと

追

慕

第六期
羽

毛

田

一

郎

尊師故吉澤徹先生逝いて茲に一年、有志相圖りて御徳を思はんとす。

願れば昭和三年我が東京府立第三商業学校設立せらるゝや、先生推されて校長となり、以来校務に勵渾刻苦せられ、その勤勉にして熱誠なる功空一からず、創立日尚淺き三商を以て旭日の如く名を馳ち得せしめたり。

先生の人格高潔、徳義至高にして、峻嚴冒すべからざる裡、亦寛厚撫すべき所あり、温情主義以て薫育に當らる。我等の先生を仰ぐや慈父の如く、先生の我等を觀るや子の如く、常に以て人格教育に御心を止ませられ、十年一日の如き、毎朝の朝禮訓話に、人生の電燈處世を説かれたり。而して銳意熱心なる先生と敬慕せる我等との一致團結は、三商精神の發露となり、以て特に一大飛躍をなさんとする時に到れり。

然るに昨年二月二十七日、先生卒然として白玉樓中の人とあられ、再び其の音容を壇上に接する能はず、恩慕の情禁じ得ず。然れども唯に哀惜嘆嗟慟哭悲嘆すべき時に非ず、我等不肖なりと雖ども、請ふて、今日以降尊師の心を體し、品行を修め

自ら高く人格を陶冶し、以て師恩に報いんことを誓はむ。
拙文以て尊師を偲ぶ、よすがとす。

その日

第七期
中

川

哲

もう考査も終つた。春は近い。のんびりする氣持もそのまゝに享有してかまはないだらうと思ふ。

いつになく早く学校へ行つて不相変皆と曰のよくあたる運動場を歩き廻り乍ら、雑談にふけてゐると誰か校長先生ののお亡くなりになつた事を傳へてきた。

エッ!! と思つた。

悲しいとか淋しいとか、驚いたといふ感情さへ伴はずに、唯さう思つた。そうしてその次の瞬間私は映島會の委員と校長室でテモストレーシヨンの感謝状をニコニコしながら御覽にあつてゐる姿が頭に浮び上つた。

(注) 映島會は昭和十四年元旦校長先生の發案により、五年生が全く自治的に創り上げ、月二回佐つ、日曜日に希望生徒と宮城、明治神宮、精國神社等を早朝参拜する會で、先生も非常に秉氣にあり御生前中四回参行したものである。その事

について話合はうと、校長先生が五年生十五名程を集められたのは一月十九日の事である。そしてその日校長先生は我々五年生が前年秋英語教授のテモストレーシヨンをやつて當局から貰つた感謝状を示され、之を表装して永久に残さうといかに嬉しくさうであつた。

それのすぐ後、眞蒼な顔で静寂な眼を凝らされる姿を解想した。そしてその現実を思つた時、何れも話する氣がふくあつてしまつた。

八時半から全生徒は講堂に集められ、大西先生が登壇された。その話は大西先生にしては宛でいつもと違つた高聲で話されたので、誰もがすぐハツとした位であつた。勿論水を打つたやうな静けさと生徒の心と思ふがまゝに引おつてゆく貴い一語々々だけが講堂の中に充満した總てだつた。その時の一言一句は、未だに感激をもつて忘れられない。中でも「自分はどうしても泣けなかつた、自分の命を投げ出すべき恩人の死んだ事を悲しんで泣けないふんで、これでも人間か? 獣にも劣つておあいかと学校へ来る途中バスの中でも考へてゐた。学校まで来ても、だがベルが鳴つて君達千二百五十人がおらりと校庭に並んでゐる姿を見た時、急に自分はもう目があけられぬ程涙が溢れ出した。

何故これだけの生徒を残して死んでしまったのか？ 千三百の生徒を置きざりにして、どうして吉澤校長は死ぬ事が出来たのか？ と思つた。さうしてどつと流れて来はうにもおられないと仰つた言葉は私の五臓六腑にしみ渡つて、その時の自分の氣持がたまらなく痛らしくなつた。何故ふら又突然襲つて来た非人情の冷静の魔物に取つかれさうにあつておちからぬ。時々人間を苦しめる情い冷やかさだ！！

自分が人間だつたら泣いて、講堂に涙の雨を降らせたいと思ひながらも……。

日本人のおおのづからの氣持を垂入れやうとしながらも……。

だが、この言葉は飛かつた。もう黙つておられなかつた。泣いた、泣きたくて泣いた。この場合涙だけが自分の氣持を率直に代表してくれるやうに思つた。

「祇園精舎の鐘の音は諸行無常と響くあり」 中学一年生でも知つてゐる一句が單ある感傷であく頭にこびりついた。教室へ入つても皆非常に静にしてゐる。靜かにくやうと思つてするのには自然性が、おのづからの心がなげけれども、今の場合誰も淋しいのだ、誰もがうら悲しいのだ、戯曲の分子の混る事はいやだ、くありのまゝの姿で悲しくみたくと思つてゐた。

※

しばらくしてやうやく自分を見つげ出すと今後どうしたら良いのかと考へ出した。

最善の努力をつくせとか、感謝の生活をせよとか、それは校長先生の現在の方針であつた。今日の現在は明日の過去である。人間の方針は現在に即應へなければ駄目だ。過去を現在に生かさうとする者と旧派といひ、世の没交渉の者である。想へば校長先生は殊に進歩的であらせられた。そしてむづろ半歩乃至一歩現在より出ておられた。未来を現在に生かさうとなされてゐるのだ。

私は途中で考へた。

併し吉澤教育の根本は一体何だらうか、三商精神とは、といふ答として、それは日本精神であらねばならないと書いた事がある。では、校長先生が死んでも、誰が校長にあつても、日本人ならこの條件は満足される筈だ、おくとも教育勅諭に基くべき日本人の教育者なら、だが今社會に多くの教育者ありと雖も誰も校長先生の良き教育に及ばないといはれるのは何故か、日本人であるのに？ この矛盾はどうしたものだ、だがすぐその論理の裏りに氣づいた。

冷水摩擦を続ける事も良い、映島會も必要だ、指導訓話の益も大きい、併しだが、吉澤校長の意見あるが故に続行するのは校長先生の御心に背き、むづろ先生の冒瀆にありはすまいか？ 唯それが良き手段であり、よき行爲であるが故に貴いのだ、だから他にまさる方法なくとすればその結果は一つである。

言換へれば吉澤教育と考へる時大事なのはその根本ではなくてその表れた部分によるのだ。丁度日本人なら皆日本精神をもつてゐる事は肯定し得るとしても、その表現された手段は忠義は楠正成、孝行は何某といふ具合に、それ／＼個性によつて分たれ、或は發達し、或は停滞する。楠正成は日本人である事よりもその忠義なる点で尊敬されるのだ。三商教育の眞價値も同様に指導訓話にあるのであり、冷水摩擦にあるのであり、教育勅語に基く教育にあるのではあいのだ。我々はちつと楠正成の特性を尚ほあけられはならない。

一人侘かて講堂の裏に立ちぬれば

涙流れつづけと又涙す

※

後記

これは大体昨年二月二十八日の日記をもとに當時を追想して書いたもので後半のくだらない理屈めいた事は當時の日記をそのまゝにしておいた。だがその気持は今でも大く違つてゐない事を恥しく思ふ。

こゝち愚文を出す事はおもはゆいけれど今の自分の氣持はとてち筆する事が出来ぬいからと考へていたゞきたい。

今は亡き

故吉澤徹先生に捧ぐ

—— 夢物語 ——

第六期

九

寛

天使 A、人間と云ふものは本當に困つたものだ、亦性こりもよく戦争を始めた。一體どうしたら仲良くなるのだらう。

天使 B、君かまはあいでほつて置き給へよ、戦争も地球の人間の総てが仲よくせねば駄目だと悟るまではむしろ薬なのだからね。

天使 A、僕もそれはよく識つてゐるのだ、然しあまりにも痛ま／＼すかて見て居られない氣がするのだよ。

天使 B、けれども君、彼等の愚かさや、残忍さは何にも今初めて始つたのでもあるまいに、今までにどつて何萬回となくあつたことじゃあないか、あんなり氣にするなよ。

天使 A、それは確かにそうだが、子が親に背いたり、子弟が恩師に仇／＼たり、男が女をもてあそんだり、女が男をだましたり、こゝちことは今までも何萬回あつたか忘れてくまふ位あつたさ。でも、此の頃くらいあま／＼い出来事の多い

時代は一度も無かつたぜ。

僕はそれが心配で惱んでゐるのだよ、第一神様は申訳が立たないもの。地球は僕の受持なんだからね。

天使B、さう云はれると、さうだね、この間も招天天使が云つてゐるよ、可近頃この天國へ招される清い人間は、地上に居る時仇名を看せられたり、低い地位に甘んじてゐたりしてゐるもの、方がおろ多いくらいなので、すよつてね、實になんかはいいことぢやあないか。

天使A、さうなんだよ、この頃地球では人心は乱れる、戦争は起る、不逞ははびこる、と云つた有様で善人の進むべき道が確立されてゐないのだよ、哀れなことだあ。

天使B、たゝか、昨年の二月の末だと思ふのだが、此處へほら、黒い髭をはやした目のするどい人間が招されて来たのを君は覚えてゐるかい。

天使A、あゝ覚えて居るとも、あれは僕が招天天使に頼んで特につれて来てもらったのだもの。

天使B、おやさうだつたのかい、実はね、僕が此の間神様の御用事で、遊止へ行つたことがあつたらう。

あの時、あの男が僕の處へ来て、「おれ、お頼みがあるのですが」と云ふのだよ、それで「何事かね、まあ云つてごらん」と云ふとね、例のあの鋭い目を輝かせ下ら、「私は地上に於て及ばず下らも私の最善の努力を盡して参りました、それ故地上のものにはいさゝかの未練も執着も御座居ません。然し唯、教へ子のことのみは氣掛りでなりません。もし貴方がこれから地上へ御出でになるのですら、此の清きものゝみの招され得る天國に於て、師弟が再び相會えることの出来る様くれぐれも努力してくれと傳へて戴けませんでせうか？」と云ふのだよ。僕は自分の妻や子供のことをでも頼むのかと高をく、つて聽いてゐたので大いに感心した次第なのだ。

天使A、さうかね、いかし君、それはあたり前のことだよ。あの人間は僕が見込んで天使の見習ひに使つてゐるくらいなんだもの。

天使B、おや、さうだつたのかい、それはおみそれ申上げた。一体、あの男は地球では校長をでもしてゐるのかい。

天使A、さうなんだ、ほら君も知つてゐるだらう、地球の一番東の端に有る小さな日本つて云ふ國を。

天使B、あゝあの今支那と戦争をしてゐる國だらう。二千六百年とか続いてゐると

天使A、さうだ、その日本の中學校長をして居ちんぢよ、そして僕はあの男こそ全くその職にたはれたと云つても良いと想つてゐるよ。

天使B、さうか、道理で口も達者だが、云ふ事も確かだと思つたよ。

天使A、それに人格だつて、決して人間共が知つてゐたくらひのものではなく、人間よりはむしろ我々に近いくらいな人だよ。

天使B、それぢやあ人格ではあつて神格か天格ぢやあないか。

天使A、あは、は、これは参つた。

天使B、然し君は今あの男に地上で何か悪評があるつて云ふことを知つてゐるかね。

天使A、あ、知つてゐる矣、でも君今更あの自己本位なあさましい人間共の衰敗なんかを我々の耳を聳す必要だといふにあるかね、僕は神様の御眼力と御命令とを固く信じて努力すればそれでいゝのさ。その上僕の目で見ちつてあの人間はたゞかあものぢよ。

天使B、或程ね、すると、これも亦人間の世界の乱れさつてゐることを証明する一つの材料とあるわけぢね。

天使A、まあそれに役立ちまくらねがおちぢらうよ。

天使B、處でどうだね、そんあに人の世がすさんでゐるのなら、僕の受持の第四億四千四百四十四萬四千四百四十四番の星にすばらしく愛の芽が出たのだが、少し地球に撒いてみないかね。

天使A、有難う、僕も以前からそれは考へてゐた處なのぢよ。そして今の話の男にはお前の地に居る子弟の中から何人か、愛の種撒きをする男を送り出せよ。つて命じて居つて有るのだよ。だからそれがはつきり決つたなら早速その種をもらひにゆくよ。

天使B、さうだつたのか、あの男の教へ子なら、その役目をきつと果す事ぢらうよ。

天使A、さうしたなら少くは地上にも幸福が訪れるかも知れないね。

天使B、で、どのくらいいるかね。

天使A、さうだね、悲しいことだが九十九%までは人間奴が芽をむりりとしてまふ事ぢらうから少くも多くもさん欲しいのだがなあ。

天使B、よし、では二億二千二百二十二万二千二百二十からいではどうだね。

天使A、それくらひもあれば十分結構だと思ふよ。

天使B、さうか、では今日はこれでお別れさう、用意して待つてゐるからね。

天使A、有難う、お願ひするよ。

天使B、亦會はう、さようなら。
天使A、さようなら。

故吉澤先生追悼会

時、昭和十五年一月十一日(金)午後六時

於、丸の内三菱クラブ、

野村氏、今日お集り願つたのは外でもないのですが、吾々にとりまゝでは何時にありまゝでも愛憎の情深い故吉澤先生の一周忌も最早やニヶ月程に迫つて参りまゝした。そこで私共はさゝやかあから、本當に有志のみが集つて追慕の情のほとほくするがまゝに「故吉澤徹先生追悼録」なる名稱のもとに小冊子を作成し、出未得る限り廣範圍の方々へお領ちしたいと計畫致しております。そしてその中の一つとしてまゝでこの座談會も開催したやうな次第です。

どうぞ皆様、腹藏なく吉沢先生の想ひ出をお話願へませんせうか？
先づ、武藤氏あたり、どうせせう？

武藤氏、さあー お話があまり急なのでさうすぐには吉澤先生の想ひ出も出ては来ないけれど……

岡田氏、僕は世界一周旅行記の叙文を喜ばせてもらひましたよ。

野村氏、学校と云へはすぐ吉澤先生と今村先生とのことが話題になるのだが――

武藤氏、僕は今村先生も良い方だと考へてゐる、いくらかじみな先生の様に想へるが……

吉澤先生は御自分から発せられ一人で学校をきりまはしておられた様だが……
岡田氏、比較をすれば、吉澤先生はなにしろ創業であつた爲、前発的であければならなかつた。例へば、短期間の間にあの様な名声を得られたのであるから、その爲には幾分外交的であり、大風呂敷的であつたと考へる。そこで今度はその反面として、内的に実力を有する人が必要であるが、今村先生はその適任であるやうに私は想つて喜んでゐるのです。

武藤氏、吾々第一期の者でさへ、その各會社に於て未だ中堅社員とはなつていないのであるから、三商にはまだよく發達の余地がある様に思へる。

岡田氏、何しろ吉澤先生は大きな事業家だつたよ。
武藤氏、單に一校長ではなく、教育者としてもりどくして居られた。今度の入学試

駭なと生きて居られたらどんなにか自慢なされるだらうに、
野村氏。しかし吉澤先生は、他の一般的な教育者の様に天真爛満ではあかつた様に思
ふ。

中川氏。さうですか？ 私の見た處では吉澤先生は大いに天真爛満であつたと想ふ
のですかぬ。

例へば、毎朝指導訓話をやりますが、その前に指導者が校長室で一才待つ間な
どに、先生は英字新聞などを巻かれて「君こ、を讀んでごらん、面白いことか
書いてあるから」など云はれたさうですが、さあその生徒はそんぷに英語など
よく出来ませんから恐縮して困つたと云ふ話があります。この様に先生はと
ても生徒を信用しておられたし、買ひかぶつておられまゝ。その急からして
も先生は天真爛満で非常に無邪氣な方だつたと想ふのですか？

飯田氏。野村さんの云ふ天真爛満と云ふのはその意味ではあく、隙がなかつたと云
ふ意味ではないか？

武藤氏。さうだ、つまり純粹の學者ではなかつた、むしろ事業家だつたのではない
か？

岡田氏。人の氣持を捉へることは実に上手だつた。

野村氏。それから吉澤先生の人気は我々生徒よりはむしろ父母にあつたのではな
かつたか？

武藤氏。それは吉澤先生御自身がさうされたのだよ。今までの教育者とは異つて、
吾々生徒に止まらず、その父兄にまで氣を配り、よく目を通して居られたのだ
よ。

野村氏。しかし先生は……
若園氏。先生と旅行して宿屋に宿つた時あど、丹前を着て楽しくみんなで遊んだが、
その時の先生は、校長先生ではなくて、まるでおやぢと云ふ氣がしてよく親
めたなあ。

飯田氏。朝禮の時、よく時局に對する痛快な皮肉を云はれて腹の底から笑はされた
ものだ。

武藤氏。それから先生は校外に於ける先生自身の行動をよく話された。
本江氏。でもあまり長い時にはいゝになつた。

一同吐笑。

武藤氏。みんながあまり永いと云ふので一時五分ぐらひで止めると約束されたこと
があつたが、亦すぐ永くなつてしまつた。

若園氏。始めて先生と旅行した時は宿に着かれてから一晩語りずめであつた。
岡田氏。家庭の先生はとても良いお父さんで、甘まかつた様に見られたが、くか
ほとんと学校の爲に働かれておられたのだから、ほんたうにたまにしか家庭でおち
着かれることがなかつたことと想ふ。それ故おこる氣にもなられなかつたのか
もしれない。

若園氏。生徒に對してもやはり甘く放任主義ではなかつたから。

武藤氏。それはたゞかにさうだ、生徒を可愛いがられた、生徒と先生と云ふのでは
なしに人間として可愛がられたよ。

岡田氏。實際あの先生は、教育家と云ふよりも、むしろ実業家服の人だつたとおも
ふぬ。吾々実業家はもつとよく先生に学んでおけば良かったと想ふ位だよ。

野村氏。或生徒が二年の時、家が困つたので学校を止めやうとしたり、誰にも知ら
さず毎月月謝を出して来ておたさうだ、そしてその事を誰にも知らせず居ら
れない。この点などは當に敬服されること、考へる。

カ丸氏。僕は或る先生から聞いたのですが、今、野村さんからお話のあつた様な事
実は、それ以外にも幾つとなく有つたのださうです。そしてそのお金も將來あ
る青年に恵かむなどと云ふことは失禮であるから、一時立替へることにして置

かう。しかし有る時拂ひの催促なしで結構だ、もし卒業してから例へ一円でも
二円でも返へず氣持があるのふら喜んで戴かう。と云ふ様な話だつたさうで
す。處がそれ善御恩になつた卒業生の中にはその後何人の挨拶のなほものも多
くさんゐるので、あれではかへつて良い事なのか悪いことなのか解らなくなつ
てしまふとおつちやつてゐました。勿論ほんの少数の人々なのでせうが。

武藤氏。学問的な先生と精神的な先生との對立には校長先生も相當苦しまれて居ら
れたのではなかつただらうか？ 吾々に教室で一才すべらす校長先生への悪口
にも意外根強いものがあつたのかもくれあいなあ。先生に五十人ぐらひの寺小
屋をやらせたら非常によかつたかも知れない。

飯田氏。いや、吉澤先生はそれでは満足せられあひだらう。もつと――進まれる
はずだ。

野村氏。吾々が此處に語つてゐるのは先生のほんの一部にしかすぎない。そして
亦これだけしかしらない、一寸残念な氣もする。

飯田氏。僕達にはこれ以上知るすべもなかつたし亦知らなかつてもよかつたのかも
知れあい。

岡田氏。生徒は先生の私生活についてあまりがれこれ云ふべきではあいと想ふ。

私の父が、一人前の商人になるにはあらゆる道びを知らなければならぬと話しちら、校長先生が仲々話せるとほめて居たさうである。

中川氏・今村校長先生が、三商の卒業生には大体に應場な点があると云はれたが、こんなものでせう。

桑田氏・さうです、對人的な態度の上手なことはちよこです。

武藤氏・三商の卒業生は紳士的で、あたりずさはらわしく人が多いよ。

大体我々はスピリット的で、例へば一つなぐり合ひの喧嘩をするよりは、まあ話せばわかる式であつた。世に出たらそれを土台にして各人の個性を生かして行かなければならぬと想つてゐる。他の学校の人はあまりにも殺伐である。社会に出て三事も四年も経た人々にも三商の卒業生はあまり劣らない。

岡田氏・校長先生は常に向上と目指しておられた、その爲に卒業してからのこともよく考へておられた、だから世に出てすぐ役に立つたのである。だが三商の卒業生とて、氣を附けなければならぬのは、あまりにもおろくなつたりしてはいけぬ。悪くなるやうな悪くなる可能性が多分にある。

飯田氏・つまり吾々は素材として世に出たのはあく、一應みかきとかけてから世に出されたのだ。

武藤氏・商業学校として、それを良いのだと想ふ、唯都會の教育は腹をつくる事が欠けてゐるものだ。それを先生は割金よくお教へられた。

岡田氏・先生の話されることは、時局のよい出来事にしろ悪い出来事にしろ、一應御自分でよく味はられたものを話されたのだから、よく話が適中したのだと思ふな。

飯田氏・亦それでふかつたなら人を動かすことは出来なかつたはずだ。

野村氏・あの先生は、生れてから、おれは悪かつたとか、あやまつたとか云ふ様に頭を下つたことがなかつた人ではあいかうら。

それはつまり強い信念があつたことになるが……

武藤氏・我々は一期であまやかされた爲か、先生は女もこはい方ではなかつた。野村氏、それはさうだ、やっぱり直接点をつける先生の方がこはかつたな。

先生とは親しくはなれたが、最後の一点とでも云ふ處を何となく親しくなれなかつたやうな氣がする。

武藤氏・巧言令色これ亦仁と云ふ福沢先生の言などをよく入れられていたやうに想ふ。

中川氏・しかし一つ……

野村氏。昔の子分が親分に會へばふつと強力な圧力と叩へられたこと、想ふが、僕は吉澤先生からさう云ふものを受けなかつた。

飯田氏。僕は先生のほめられ方は親の子を甘やかすやうであつて決して決して功利的なほめ方ではなかつたと考へるなあ。

武藤氏。實際よく生徒をほめられた。

野村氏。蔭介石は自分の部下の士官学校生徒の名とその卒業式に一夕免状を與へなからおほえてみると云ふが、先生は全然その反對ではあいかうら。

若園氏。亦ほめれば自然人情として生徒も悪いことは出来ないで向上するだらう。

と云ふことを御承知で、ほめられたのではあいだらうか？ あれを反對にのみかみおこられたのなら吾々若い者は反抗心を起してしまふ。

武藤氏。相當永い間教育にも従事しておられたのだから、我々が考へる以上に色々なことを考へておられたのだらう。

野村氏。吾々が非常に有難いと想ふことは、物に順であれと云ふことをよく教へられたことである。これは今も非常に有難いと考へてゐる。反對にさからふことを教へられたら、それでも若いのだからとても亂れてしまふことだと思ふ。吾々にプライドを持ってと云ふ教育であつた。

岡田氏。先生は思ひについて止に對する思ひだけではおく下に對する思ひも考へねばならぬといふ（柳營御夜話）の時話なされたが、僕にはこれが特に強く印象に残つてゐるよ。

下からの思ひを本當に考へるあらは、必ず下からの思ひ亦自分にかへつて来るよ。武藤氏。自分は今にあつてこそ、食前感謝の詞がしみじみに身に染みて来たが、在校中にもつと鋭くつ、込んでおけば良かったなあ。

里村氏。今まで先生の教育方針とか、運営とかについての話が出たが、誰れかもうつとやはらかな方面を知つてゐる人が居たら話して戴けないかうら、僕は全然知らないのだからなあ。

野村氏。校長先生には恋愛は出来なかつたよ。

飯田氏。いや、さうかいら、恋愛は出来たよ。

若園氏。我々と旅行に行く時午後二時二十五分と約束して於いたのだが、その実、汽車は二時二十四分発であつたことがあつた。そしたら先生は何時も時間まきにはしかいらつしやらないので乗りおくれてしまった。

それから亦四谷で省線を待つ時、日曜だったので、いくら待つても急行が来なかつたら、大さうおこられて、なぜその由を駅に明示して置かないかと取長ま

でやり込められたさうです。

武藤氏、あの先生は信念の強い方であつた。だから文部省あたりにもいゝ、か下人に頭を下けないで、いたづらに向ふの云ふ通りにならなかつた。あれなどで生後は大分とくをくしてゐるよ。

本江氏、誰れか御病氣のことは……、中川氏、大西先生からの話ですが、死ふれる前まで入学試験のことを心配されてゐたさうです。

野村氏、僕は二月二十二日に学校へ行つた時、丁度入学試験中だったので、いくら申込んで會つてくれあかつた。仕方がないので僕は一人で校長室へ入つて行つたが、その室の鏡にうつつてゐる先生の顔がとても威厳があつてそれ以上入つて行かれあかつたよ。

若園氏、澤井先生から聞いたのですが、以前は感情の動きが激しくて先生に對する對度あど感情によつて、とても激しく變つたりしたものが、不思議と二月に入つてからはとても落着かれて、そんな事は文くもなかつたさうです。

桑田氏、水村先生に亡くなられた翌朝御會をしたが、最後までやはり入学試験の事を話されてゐたさうです。

岡田氏、話は別だが、先生は色々なものをとてもよく書かれてゐたよ。原稿などもたくさん有つたが、どうあつたか。

野村氏、もう時間がありませんから、誰れか結論をつけてくれませんか。

桑田氏、先生は社會から超越されて居られたのではあいかしら。

岡田氏、御自分の世界の、之がかれて、その信念のためにあらゆるものを犠牲にされてゐた。その犠牲にされたことが反感を買つた原因にもなつたのだが、

野村氏、今は時間がありませんから、今日はこれ位で止めておきます。最後に本日わづ／＼御出で下さつたことを御禮申し上げますと共に、この追悼録作成の爲に一更の御援助をお願い致します。どうも有難うございました。以上。

※

出席者(一〇名) 第一期、岡田一郎殿、武藤 廉殿、野村一介殿

第二期、桑田栄太郎殿、里村彦太郎殿

第三期、飯田眞六殿、若園 豊殿

第六期、カ丸 寛殿

第七期、中川 哲殿、本江 耆殿

故吉澤先生追悼錄作成賛同參加者芳名

大西 確 郎 殿
坪井 泉 殿
澤井 次 男 殿
清田 泉 一 殿
三宮 宇佐 考 殿
高橋 昇 一 殿
小宮 登志 雄 殿
增田 正 雄 殿
里村 秀太郎 殿
若園 豊 殿
平塚 実 殿

飯田 眞 六 殿
吃岡 徹 殿
照井 寛 治 殿
佐藤 照 夫 殿
武藤 廉 殿
野村 一 介 殿
神保 忠 雄 殿
白石 一 郎 殿
永田 進 殿
大木 廣 司 殿
鈴木 庚 五 殿
忍足 良 明 殿

川島 源 太郎 殿
糸 櫻 美彌 作 殿
森 幸 彦 殿
太田 実 殿
原 島 孝 一 殿
中川 哲 殿
根岸 英 夫 殿
市川 益 雄 殿
瀨尾 誠 一 殿
細正 金次 郎 殿
川口 三 藏 殿
佐藤 馨 殿

村田 邦 夫 殿
植田 達 三 殿
石田 穰 殿
本江 清 殿
工藤 仙吉 郎 殿
齋藤 晴 海 殿
小倉 春 雄 殿
富樫 貞 郎 殿
掛川 庄 太郎 殿
凌 迎 義 雄 殿
檜 山 秀 男 殿
小島 利 八 郎 殿
熊谷 乙 彌 殿
長瀬 正 夫 殿
與住 市 夫 殿

高橋 壽 太郎 殿
大藤 松 郎 殿
石田 五 郎 殿
羽田 勝 惠 殿
石渡 正 一 殿
稻村 繁 殿
栗原 孝 殿
下田 稔 殿
福田 健 一 殿
島 小 豊 次 殿
羽毛 田 一 郎 殿
江川 義 三 郎 殿
星野 英 孝 殿
中沢 茂 雄 殿
大川 博 三 殿

中山 孝 藏 殿
青木 正 一 殿
荒川 正 三 郎 殿
渡辺 好 之 亮 殿
小林 幸 次 郎 殿
中島 清 也 殿
藤川 篤 信 殿
古川 政 之 助 殿
柴崎 久 資 殿
堀内 正 夫 殿
遠橋 吉 雄 殿
桑田 宗 太郎 殿
岡田 一 郎 殿
力丸 寛 殿
山本 辰 台 殿

△ O V

此處に今更申上申るまでもなく、故吉澤先生の御恩は決して我々の筆舌に盡し得るものではないと申せし、亦その御恩に對しまして我々が各々の一生を以て、貞を以て御應へ申上げねばならぬことも論ずるまでもございませぬ。

そして、これ等の心持は誰云ふまでもなく自から我々卒業生総ての胸深くに刻みつけつけられて居るものなのでございませぬ。

然つて本追悼録も誰に奨められて作つたのでもなく、亦誰に強ひられて参加したのでもなく、前述が如き心持がいつか一致し、発動して出来上つたものなのでございませぬ。唯本計畫を日時その他関係から全同窓生の方々にもれなく御知らせすることが出来ませんで、是爲に、すべての方々御参加を得られなかつた事は、誠に残念に亦申譯なく存じております。

我々に致すべくは、もとより本追悼録の完成によつて御報恩が濟んだなど、申すのではありませぬし、むしろそれは我々今後の行動にこそかゝつてゐるのだとも信じております。

然つて本追悼録への参加、不参加などは、將來の責務に比べまゝなれば、誠に眼前の一微事たるにすぎないこととございませぬ。

願くはすべての同窓生が益々報恩感謝の念を新たに、各自の生活を深く高く切り開かれ、ゆくことを切望して止みませぬ。

最後に、一度、この拙い計畫を發表致しますや、いち早く各方面よりよせられまゝた御尊意に對しまして、心より御禮申上げます。

幸にも此處に御覽の如き追悼録の出来上りまゝたのも、すべてみな、皆様方の御力添への賜と重ねて感謝致します。

—— 編輯後記にかへて ——

昭和十五年刊行

印刷所

東京市深川區三好町四丁目五
永島麿寫堂